



Title	The Nigger of the "Narcissus" に見る Narcissism の問題
Author(s)	中村, 嘉男
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1985, 25(2), p.125-136
Issue Date	1985-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/15202">http://hdl.handle.net/10069/15202</a>
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-22T09:22:23Z

# *The Nigger of the “Narcissus”* に見る Narcissism の問題

中 村 嘉 男

## The Problem of Narcissism in *The Nigger of the “Narcissus”*

Yoshio NAKAMURA

*The Nigger of the “Narcissus”*における narcissism の問題が今日まで軽視されてきたのは、恐らく、黒人水夫 James Wait と彼を取り巻く数人の水夫たちの自己中心性があまりにも露骨で批判しやすいためだろう。Wait の自己愛に加えて、Donkin の egotism や Belfast の sentimentalism、それに料理人 Podmore の fanaticism などが簡単に非難できるため、narcissism そのものに重要な問題が含まれているとは考えられにくかったようである。しかし、narcissism が作中であからさまな利己主義や自己陶醉症のみならず、根源的な自己愛の意味でも用いられていることは、Wait が死に際に見せた死に対する救いようのない恐怖心を見れば明らかだろう<sup>1</sup>。想像力によって異常に強められたそのなまなましい恐怖心は、narcissism が結局私たちすべてを根底から支配する力となりうることを示しているのだ。

また narcissism は、私たちが生きている限り捕われざるをえない人生の目的意識の中に、必ず紛れこんでくるものである。私たちは生きている限り動かざるをえず、動くからには目標を持たざるをえない。しかし、目標に向かって懸命に動くものには、どうしてもなく narcissism の影が付きまとうのだ。その影は、“its own destiny” (p. 29) に向かって一心に航海する帆船にさえ認められると言えるかもしれない。あるいはそれは、*The Nigger of the “Narcissus”* の序文にでてくる一人の百姓が野良仕事に没頭している姿にも窺われると言えよう。道端の木陰で休んでいる「私たち」人生の旅人から眺められて

いることも知らず熱心に作業するその人には、どこか空しい感じが付きまっ  
ているのである。

Sometimes, stretched at ease in the shade of a roadside tree, we watch the motions of a labourer in a distant field, and after a time, begin to wonder languidly as to what the fellow may be at. . . . It may add to the charm of an idle hour to be told the purpose of his exertions. If we know he is trying to lift a stone, to dig a ditch, to uproot a stump, we look with a more real interest at his efforts; we are disposed to condone the jar of his agitation upon the restfulness of the landscape; and even, if in a brotherly frame of mind, we may bring ourselves to forgive his failure. We understood his object, and after all, the fellow has tried, and perhaps he had not the strength—and perhaps he had not the knowledge. We forgive, go on our way—and forget. (p. 11)

目的意識に捕われ懸命に労働している人は、ここで、目的意識から解放され休息している人から大目に見られ許されようとしている。前者に許しが必要なのは、恐らく、夢中になればなるほど自分という檻に固くとぎされてしまうという構造に彼がはまりこんでいるからであり、彼がめざす目標も達成したとたんに別の新しい目標があらわれてきて、結局達成されずじまいになるからだろう。この宿命づけられている目標達成の不可能性について、*The Nigger of the "Narcissus"* で最も深い英知を備えている老水夫 Singleton は、“[James Wait will] Die in sight of land.” (p. 130) と言っている。陸を見ながら陸に着かないまま死ぬのは、陸に着いたら女の子と楽しい食事をしようという夢を果たせないまま海上で死んでしまう Wait 一人の定めではない。それはほとんどすべての人の宿命なのである。ほとんどの人が、死ぬまで目標という夢に捕われ続け、それを果たせないまま死ぬのだ。しかも、航海中島の方が大陸より視野に入ってくる回数が多いように、目標の中でも女の子との食事のような小さいものが人の前にあらわれやすいため、結果的には小目標（島）の方が致命的となってしまうのである (p. 156)<sup>2</sup>。

死まで続くこの目的意識の執拗さは、先に述べた死に対する恐怖心のなまなましさと共に、narcissism の根深さをよく物語っていると見えよう。特に目的

意識の中には、それに捕われていることを私たちに自覚させないほど小さいものがあるだけに、私たちが narcissism の檻によりとどしやすい構造がそこに認められるように思われる。そもそも、木陰で休んでいた旅人でさえ、いつかはどこかへ向かって旅を続けざるをえず、そのとき目標を持たないわけにはいかなないのである。しかし、その彼の目標に対する意識の存り方は、野良仕事に夢中になっていた人のそれと同じものではありえないだろう。ではそれは一体どのような形をとっているのだろうか。

*The Nigger of the "Narcissus"* の主要人物の一人 Singleton は、正にこの問いに答えるために創造された人物であるようにみえる。なぜなら彼は、自己愛や目的意識から誰よりも解放され、この世への未練が一番少ないはずなのに、嵐の中を三十時間も立ち通して舵をとり続けたからだ。そうすることによって彼は、目的意識からの解放が必ずしも横臥の姿勢ばかりとることを意味しているのではないことを、いやむしろ積極的に立って行動することでもあることを、身をもってあらわしているように思われる。

おもしろいのは、この Singleton の一番印象的な姿が舵機に向かっての三十時間の立ち姿であるのに対し、誰よりも強く自分自身に捕われている Wait の特徴的な姿勢が仰臥であるということだ。つまり、序文で見られた畑で立ち働く人と横臥する旅人の優劣関係が、少なくとも姿勢に関する限りでは、作中において完全に逆転されているのである。これは、Wait の仰臥が目的意識から解放されたものではなく、反対にそれに強く捕われた見せかけの姿勢であるところから一つは生じた逆転なのだろう。ベッドに横たわりながら Wait は、立ち働いている乗組員を大きな心で許容するのではなく、逆に、自分の周りに立たせて自分の面倒を見させながら、なおかつ軽蔑するのだ。

しかし、この説明で Wait の仰臥の逆立ちした意味は理解できても、なおわからないのは Singleton の立ち通しの姿である。一体何が彼をしてそれほどまで頑強に死に立ち向かわせたのだろうか。死への短時間の抵抗ならともかく、三十時間に及ぶそれをほかならぬ Singleton が、すなわち自己愛や目的意識から誰よりも解放されていて生への執着心が最も小さいはずの老水夫がやり遂げた秘密は一体何なのだろうか。

これについて考察をすすめるために、嵐の中で Singleton と同じようにめざましい活躍をした数人の乗組員にまず目を向けてみたい。その乗組員というのは、傾いた船の中で懸命に指揮をとり続ける Allistoun 船長と、何時間もかかって熱いコーヒーをつくる料理人、それに甲板室にとじこめられた James Wait

を助け出す五人の水夫たちである。彼らにいずれも共通しているのは、彼らが嵐の中で他人のためにめざましい働きをしたということのほか、彼らが程度の差こそあれ皆自己愛と目的意識に捕われやすい人たちだという点だ。そのような傾向を持った彼らの行動意識を浄化する視点があるとすれば、それは、彼らの背後で彼らすべてを支える Singleton だけが所有しているように思われる。逆の言い方をすれば、Singleton の立ち通しの秘密を解く鍵は、narcissism の檻にとどされやすいほかの乗組員たちの行動をまず理解し、それを Singleton の行動と比較対照することのうちに求められると考えられるのである。

嵐の中で船が大きくゆれてマストがほとんど水平になるほど傾いたとき、乗組員たちは甲板にころがりながら必死にロープを攪んだりして海中に投げ出されまいとした。このとき彼らは、船が九十度近く傾いているので、甲板に立とうとすればマストと共に水平にならざるをえず、甲板にころがれば垂直に近づいてしまうのである。また、いかなる格好であれ必死になって船にしがみつくとときには、しがみついているという意識のかけらもないほど頭の中が空白にならざるをえない。つまり嵐は、船をほとんど横倒しにすることにより、立つことが水平になることであり横たわることが垂直になることだという矛盾した関係を一瞬のうちに成立させ、そのことによって人間の自己愛および目的意識の完全な消滅と生へのあくなき執着を同時に実現させたのである。

しかし、すでにこのとき、“The Masts! Cut! Cut!...” (p. 58) と口々に叫ぶ水夫たちと、“No! No!” (p. 59) と叫ぶ船長との対立が始まろうとしていた。船の重心を不安定にする垂直を排除して水平の安全だけをとろうとする水夫たちに対し、船長は、垂直と水平の対立にもっと耐えることを求めたのだ。船長のこの要求に、Donkin を除いた水夫はおとなしく応じる。彼らはこのとき、手すりやロープなどに“their teeth” (p. 60) すら使ってしがみつくことにより生に固執しながら、死への恐怖感から不思議に解放されていたのである。特に Singleton は、マストほど高くはないがやはり垂直に立った舵機にしがみついて、船長の求めに積極的に応じようとしたのだった。

奇妙なのは、船長を最も強力に支える Singleton と船長の間、目的意識の点で身分の差以上の大きな開きがあるということである。例えば、Allistoun 船長が“a little house, with a plot of ground attached—far in the country—out of sight of the sea” (p. 31) で一生を終えたいと望んでいるのに対し、Singleton は海の冷たさ暗さを知悉しながら海に死ぬことを厭わないの

である。また、前者が the *Narcissus* の入港と同時に船に上がりこんできた貴婦人らしい身なりをした妻と連れ立って、晴着に着替えて早々と船から下りて目標に向かうのに対し、後者は、字が書けないため書類に十字架の印を書き込み海運会社の事務員から "What a disgusting brute," (p. 169) と侮蔑されて給料を受け取りながら、その給料を有効に使う目当てもなく、どこへ行くという当てすらないのだ。四十五年の長きに渡って有能で誠実な水夫として務めながら Singleton が相変わらず並水夫のままなのは、陸にいたるとき彼が大抵 "day-light" (p. 7) も見分けられない泥酔状態に陥っていて、出世を初めとする俗事との係わりを一切持とうとしなかったからである。それで彼は、目的意識や向上心がそのいかがわしさを疑われることなくのさばっている陸では、人々からいわれのない軽蔑を受けることになるのだ。これに対して Allistoun 船長は、海でも陸でも目的意識にひっぱられてさっそうとしているのである。

しかし、たとえ船長がその責任ある地位のため特に海で目的意識に捕われやすくなっているとしても、彼が絶対にそれから解放されなければならないのは、マストを切るなど命じたときである。このとき彼は、間違っても船主との契約や妻子のことを思い出したりして判断を狂わされてはならない。彼はただ一心に前方を見つめながら荒れる波風に船がマストを切らないでもちこたえられるかどうかだけを見極めねばならないのだ。恐らく彼は、"No! No!" と叫んだとき、海と風と船の動きに観入し切ってそこからものを言ったのだろう。間違いないのは、自己愛や目的意識から誰よりも解放されている Singleton が、船長の言葉をうけて舵をとりながらほとんど船と一心同体となって波風を乗り切ろうとしていたことだ。何も考えずに船と一つになり荒波に向かって舵をとり続ける彼のその姿には、船と船の乗組員がそれぞれの命をまかして悔いない死への最高の抵抗の形が認められると言えよう。正にこのために Singleton の姿は、目的が何であるかも忘れて野良仕事に没頭する人の姿に近似しながら、narcissism の影から解放されているのである。

嵐の中でめざましい活躍をした乗組員のうち、船長と Singleton は自己愛や目的意識から解放されて嵐に立ち向かうことにより船と全乗組員を守りぬくことに成功したように思われる。では、料理人 Podmore の場合はどうであろうか。彼が炊事室までコーヒーを沸かしに行く前に皆に向かって叫んだ "As long as she [this ship] swims I will cook!" (p. 81) には、いかなる状況の下でもおとなしく死を待たたりしないで、自分の仕事を最後までやりぬこうという気構えが感じられる。結果的にはその気構えが死への徹底的な抵抗となり、全乗

組員から感謝される熱いコーヒーをつくらせるのだ。コーヒー沸かしはこの場合単なる目的であることを越えて、その行為自体が成就であるものに変化していると言えよう。

ただ、彼の行為を忘我の野良仕事とは少し違ったものになっている愛他的傾向は、その価値が強調されすぎると、彼の行為の意味を高めるところか逆に下落させかねない。嵐が静まったあと Podmore は、自分の命をかけた愛他的行為によって自分が “the object of a special mercy” (p. 83) になると主張したが、反対に皆からからかわれて “the reward of irreverence” (p. 84) を受けとる羽目になる。彼の言葉にあらわれている目的意識は、その自己中心的な性格のため、折角の彼の偉業を大きく損わざるをえないのだ。恐らく、コーヒーをつくる時彼の頭の中心にあったのはこのような利己的な目的ではなく、皆を喜ばせてやりたいという単純な思いだったであろう。しかしそれとでも、前面に強く押し出されれば何となくいやしくなる。うち続く冷たい波風に冷えて弱り果てた皆の体を暖めて元気づけてやろうという思いも、行動の目標として高く掲げられてしまえば、その愛他主義がまばゆすぎて目をそらしたくなるのだ。困っている人を助けるという同情の行為のむつかしさは、一つは、助ける側が助けられる側より精神的に優位に立つてしまうところから生じる。助けること自体がすでに優位に立つことだから、それを目標として掲げれば、避けようもなく倫理的矛盾が生じてしまうのである。目標として掲げなくても、良いことをしているんだという自己陶酔的な気持がでてくるのを、いかんともしがたい人は多いかもしれない。

同情につきまとうこの種の narcissism を逆に利用して、己れの私利私欲をはかるのが James Wait と Donkin である。二人は人の好い水夫たちの同情心を巧みに刺激し、彼らを博愛主義的な sentimentalism に陥れて自分たちの都合のいいように動かそうとする。特に Wait がそのことに成功するのは、あらゆる人が死に対して抱く恐怖感から瀕死の重病人への憐れみが生まれることを彼がほとんど本能的に知っていて、その利用の仕方を用意のうちに心得ていたからである。それで彼は自分が死にかけている病人だと主張し、乗組員たちの同情を集めて、航海も終わりに近くなって病死するまで寝て過ごすことに成功するのだ。

とはいえ、五人の水夫が Wait を水浸しになった甲板室から救い出そうとしたとき、五人は Wait の術中にはまっていたわけではなかった。船室にとじこめられたのが誰であっても、恐らくこの五人は救出に向かっただろう。その意

味で Wait は、この世に生まれ存在しているというだけで人命救助という善の行為の対象となり、そのことによって善の源となっているとも言えるかもしれない。<sup>3</sup>

ただ、五人の水夫による Wait 救出から narcissism の根本的な問題点が鮮明に浮かび上がっていることも否定できない。それは、危ないところを助けられながら助けられたことに不平をこぼす Wait と、その Wait に強い憎しみを感じながらも大切に連れ帰る五人の水夫の双方が浮かび上がらせているものだ。双方がそれぞれの立場からあらわしているこの問題点とは、結局、死に対する恐怖からでてきていると思われる。Wait は、救助隊が来てくれたとわかると狂ったように騒ぎ立て助けを求めながら、救出されるとまるで “a doll that had lost half its sawdust” (p. 72) のようにぐにゃぐにゃして頼りなく、それでいて、傾いて危険な甲板を命がけで船尾桜甲板まで帰らねばならないことに対して文句をつける。その男らしくない態度は、必死になって生を求めながらその生に必然的に付随する死に直面しようとしないうために生じていると言えよう。彼が死に対して本能的に感じる恐怖に負けてそれをごまかしたまま生に執着するところから生まれていると考えられよう。

また、自分たちの命を危険にさらして Wait の救出に全力を尽す五人にも、死に屈服しているところが認められないではない。それは、救助された瞬間から男らしくない生への執着をそのぐにゃぐにゃした体で表現する Wait を憎らしく思いながらも、五人が壊れ物のように大切に彼を扱って守りぬこうとしたところによくあらわれている。生を守るためなら死をものもしない五人が、生に固執しながら死に立ち向かおうとしない Wait に嫌悪感を覚えるのは当然だが、それでも彼を大切に連れ帰るのは、命は守りぬかねばならないという至上命題のほかに、死におびえる心に対する同情が彼らのうちにあったからだと思われる。その同情の気持は、Wait の気むつかしさが彼が身近に感じている死の “provoking invincibility” の結果にすぎないとか、そのような死と仲間なら “Any man may be angry...” という言葉などにあらわれている (p. 73)。Wait の男らしくない態度を、彼に差し迫っていると思える死に免じて許そうというのだ。

死がこれほどまで人を妥協的な気持にさせる力の源は、最初にも少し触れた死に対する底無しの恐怖に求められる。その恐怖が、死にまつわるすべてに対する私たちの反応の固定性を説明していると言えよう。あの鉄のように厳しい Allistoun 船長でさえ、Wait の目にほとんど動物的な死への恐怖を認めて憐憫



をもよおし、彼が本当は自分は元気なんだという幻想にとざされたまま安らかに死ぬるようにしてやろうとしたのである。死は、他人の死も自分の死も体験できないという意味ですべて幻想であり、それゆえ安らかな幻想の中で死なせてやろうとする船長の配慮は英知の一つのあらわれであるかもしれない。船長自身、底知れぬ暗黒を秘めた海の全く見えない陸の真中で一生を終えたいと望んでいるが、それも賢明な方法なのかもしれない。

だが、この船長の折角の配慮も Donkin によって台無しにされてしまう。船長の配慮が功を奏して Wait が死の差し迫っていることも知らず女の子との楽しい食事を夢見ていたとき、Donkin が残酷にも水葬の現実を彼に突きつけ、面と向かって “Feet fust, through a port ... Splash! Never see yer any more. Overboard! Good 'nuff fur yer.” (p.153) と言うのだ。この言葉に Wait は子供のようにおびえてしまい、あれほど直面するのを避けていた死の現実をその恐ろしさに魅入られたように見つめながら、“Overboard! ... I! ... My God!” (p.153) という無残な絶望の言葉を残して死ぬのである。死は Wait が最も恐れていた全く救いようのない形でやってきたのだった。

このような死の恐怖に無意識のうちに屈しているのは、Singleton を除いた全乗組員である。Wait や Donkin に振り回される水夫たちばかりでなく、Wait を無理やりベットに寝かせておこうとする Allistoun 船長も、Donkin の顔色が悪いので彼に休めと言う一等航海士 Baker も、皆心の奥底では死に屈していると言えよう。そこから病人に対する優しさと微妙な narcissism が生まれてくるのである。それは疑いもなく一般に善の行為を促すと思われる心の一つの形、つまり同情の一種にほかならない。それは、思いやりとか友愛とか寛容といった様々な美名で呼ばれているものであり、それに振り回されない人はいないと思えるほど根源的な意識の在り方である。

この美しい気持が the *Narcissus* においてしばしば人間関係を悪化させるのは、もちろん、それに微妙にまつわりついている narcissism が原因である。では、この narcissism を払拭した同情というものは存在しないのだろうか。同情には必然的に narcissism が忍びこんできて、人間関係をややこしくしてしまうのだろうか。助け出されながら文句を言う Wait や、助け出してやった相手に憎しみを感じる五人の水夫のように、同情の行為に矛盾や葛藤はつきものなのだろうか。

ここでもまた、嵐に敢然と立ち向かうことによって恐るべき暗黒の死に対する最高の抵抗の形を示した Singleton が、narcissism の影を全くもたない同

情のあるべき姿を見せてくれている。最後にこの Singleton と真の同情の問題について考察して、この小論の締め括りとしたい。

Singleton の James Wait に対する態度は、ほかの水夫たちのそれに比べ際立って冷淡である。死につつある病人の特権を振り回す Wait に向かって “Well, get on with your dying, ... don't raise a blamed fuss with us over that job. We can't help you.” (p. 42) と言ったときには、Singleton は、哀れな病人を無慈悲にも突き離れたようにさえみえる。しかし彼はここで、Wait に限らずすべての人が己れの生の土台にしなければならない個としての宿命を突きつけているだけなのだ。その宿命とは、人が集団の中で一人ひとり singleton であり、それぞれの死に独りで立ち向かわねばならないという厳しくも単純きわまりないものである。が、これを自らの生活の中で真に生きているのは *The Nigger of the "Narcissus"* において Singleton しかいないのだ。彼だけが、個の宿命への直面が孤独の中にとぎされることを意味するのではなく、孤立と連帯の同時的成立へ向けての運動につながるものだということを、毎日の生活行動によって明らかにしているのである。

特に彼がそのことをはっきり示してくれたのは、嵐の中で三十時間も舵をとり続けたときである。このとき、荒れ狂う海に “its heartless might” を認め、暗黒の死へ彼を招く海の “impatient voice” (p. 99) を聞きとった Singleton は、暗い海の無慈悲さと残酷さを Wait 以上に思い知ったと言える。それでいて彼は、Wait のようにそれに病的な恐怖を感じたりはしなかった。水平に横たわったまま平らな海の下の暗黒の底へ落ちていく自分を想像して恐怖に押しつぶされた Wait とは決定的に異なり、Singleton は、舵機に必死にしがみつ়くことが垂直と水平の姿勢を同時に成立させる傾いた船の中で、暗黒の力を情容赦なくぶつけてくる海に全力で対抗したのだ。その姿は孤独であると同時に、the *Narcissus* とその乗組員全員への連帯を表示していると考えられる。個の宿命への徹底的な直面を通して、narcissism の消滅と連帯の可能性を指し示していると見られる。

結局、一見無慈悲な Singleton の Wait に対する言葉は、各々の人が集団の中の singleton だという宿命に真に目覚めれば見えてくる連帯の可能性を暗示していたと考えられよう。だが現実には、Singleton の言葉によってすっかり意気消沈してしまう Wait のように、narcissism の中にとぎされたまま個の宿命に直面する勇気をもちえない人は無数にいる。その結果、個々の人が singleton

であるような集団はほとんど見あたらず、singleton は *The Nigger of the "Narcissus"* の Singleton のようにいつも独りのことが多い。ところが、こうした現実、その作品で現出させられていると同時に消滅させられてもいると言えるのではあるまいか。というのも私たち読者は、作品に接しそこで跳梁する narcissism に直面することによってその構造が理解できるようになり、そのことを通して narcissism から解放される契機が捕えられるようになるからである。そしてそのとき Singleton と、個の宿命を基盤にして連帯する可能性もでてくるからである。

作品に接して私たちにわかってくる narcissism の構造とは結局 the *Narcissus* という船そのものが具現しているものであり、物語の話者である乗組員の一人から、“She [The *Narcissus*] was exacting. She wanted care in loading and handling, and no one knew exactly how much care would be enough. Such are the imperfections of mere men!” (p. 51) という言葉によって表わされているものである。人間の “imperfections” を映す the *Narcissus* は絶え間なく乗組員の注意を喚起し、それを通して彼らを narcissism の檻から現実へ連れ出そうとする。つまり、the *Narcissus* は、narcissism を映すことによってそれとの一体化に近づきながら、同時にそれを破壊するものとしても機能しているのだ。

一つのものが互いに否定し合う要素を同時的に内に含んだ構造は、立ち働く人を横臥の状態で大目に見ながら自らもやがて立って動く運命にある序の旅人や、*Pelham* という通俗小説に読み耽りながらその作品世界から離れている Singleton などにも窺われる。旅人は立ち上がって旅を続けるとき、立ちながら横臥の視点で、つまり目的意識から解放された見方でものを捕えていこうし、Singleton も、narcissism が登場人物に演じさせる通俗劇に熱中して見入りながら、同時にそれに巻き込まれない自由を保っている。彼が読んでいる Bulwer Lytton の *Pelham* は当時の伊達男たちのガイドブックになったと言われており、その主人公に Singleton が自らを重ねて narcissistic な夢に耽っていると到底考えられないため、彼がその本に没頭している姿は一見 “Mystery” (p. 6) としか言いようがないように見える。が、その本の “polished and so curiously insincere sentences” (p. 6) は、Singleton の傍らで人の好い水夫たちをだます Donkin の滑らかな弁舌と同質のものであり、Singleton は言わば読書に没頭しながら、彼の周りで起っている narcissism の茶番劇と同質のものに一心に見入っていると考えることもできよう。人生が卑少な narcissism の

演じる劇であることに驚いて見入りながら、その見入る力の強さによって Singleton は逆にその劇から離れている。人間の "imperfections" に観入しつつ離れる Singleton は、ちょうど "exacting" な the *Narcissus* の要求に誰より先に気づいて答えることができるように、narcissism の構造に誰よりも敏感であることによってそれに一番しっかりした対応ができるのだ。

そして一番大切なことは、*Pelham* に読み耽ける Singleton の姿に、*The Nigger of the "Narcissus"* を読み耽ける私たちの姿が重なってくるということである。もちろん私たちは Singleton のように自然に備わった英知をもっているわけではないが、それでも、narcissism の演じる劇に見入りながらいつか私たちはその動きに敏感に反応して対応できるようになり、それによって narcissism から解放される契機を掴む可能性もでてくるのだ。その可能性は、the *Narcissus* が嵐の中で横に傾き "care" を一番必要としていたとき三十時間もそれにつきっきりで面倒を見た Singleton が誰よりもはっきりと指し示してくれているものである。その Singleton の姿に私たちは、彼の限りない優しさと厳しさを同時に見ることができる。瀕死の重病人とも言える the *Narcissus* を超人的な努力で看病しながら、彼には narcissism の影も認められないのだ。その姿には、Conrad の作品に共通して見られる厳しさが彼の優しさの反映にほかならないという一貫した構造を認めることもできよう。"no one knew how much care would be enough," ということを知悉していた Conrad は、ほとんどの作品において、"imperfections of mere men" に厳しい注意を払いながら、それをそのまま人間に対する彼の優しさの表現とすることができたのだ。特に *The Nigger of the "Narcissus"* において、この上ない優しさとこの上ない厳しさを同時に生かした Conrad が、その作品に "the utmost sincerity of expression" を求める「芸術家」としての命をかけると言い切れた<sup>4</sup> のも当然のことだろう。彼は陸で生きていくことが海の視点をもって実現できることを、単なる思想を語ることによってではなく、一つの芸術作品を創造することによって証明しようとし、そのことに成功したのである。

#### 注

1 Joseph Conrad, *The Nigger of the "Narcissus" and Typhoon & Other Stories* (London: Dent, 1950), p. 153.

以下、*The Nigger of the "Narcissus"* から引用する文の頁数は本文中に示す。

- 2 Ian Watt は、その著 *Conrad in the Nineteenth Century* (Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press, 1979) において、“the sight of an island” と Wait の死を結びつけ、さらに彼の死後吹き始めた風も彼の死に関連させる Singleton を迷信に囚われていると見ている (pp. 118-124)。しかし、気圧の変化が風を起し、瀕死の病人に死をもたらすことがあるように、Wait の死と風を関連させることは、あながち迷信的であるとは言えないのではあるまいか。いずれにせよ、Singleton が風と死を理論的に結び付けられないことが、一層強く彼を人生の不思議さに直面させているという見方も必要だと思われる。
- 3 Albert J. Guerard は、その著 *Conrad the Novelist* (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1958) において、James Wait を “the subconscious, the instinctual, the regressive “とか” Satan” と見る批評家に同意し、自らも Wait を “human ‘blackness’” と見たり (p. 107)、“evil” と見たりしている (p. 110)。このような見方が安易になりやすいのは、Wait を、私たちが操縦したり矯正したりできる「半分」と見てしまう傾向があるからだ。Wait は全体の半分ではなく、私たちすべてのうちにあって、私たちの全体を常に支配しようとするものである。それは、無意識とか本能とか退行性とか悪などに限定できるものではない。逆にそれは、意識性とか想像性をふんだんにもっており、発展的動きと善を促す力ももっている。
- 4 Watt, p. 76.

(昭和59年10月26日受理)